

沿岸部の皆さんと共に歩む

サッカーを通して交流

古川北中学校では、五月五日に、気仙沼中学校と大谷中学校のサッカー部を招き、交流試合を行いました。

交流試合は、北中サッカー部顧問の堀谷良悦先生が、交流のある気仙沼市の先輩を見舞った際、被災地の学校ではサッカーの練習も満足にできないという話しを聞き、被災地の子どもたちを元気づけるため、親の会や地域の皆さんの協力を得て実現しました。

サッカーを通して交流を深めた子どもたちには友情やきずなが芽生え、最後には再会を誓い合いました。笑顔が絶えない気仙沼中と大谷中の生徒たちに、北中の生徒も元気をもらったようです。



県大会で再戦したい
高橋 謙斗くん
古川北中学校 3年
サッカー部キャプテン

交流試合では、相手を元気づけるため、遠慮せず全力でぶつかりました。試合後は、一緒に昼食を食べながら「練習はどこでやってるの?」「好きなサッカー選手は?」という話題で盛り上がりました。最後に「次は県大会でおおう!」と誓ったので、二校に負けないように練習を頑張ります。

温泉で心と体を癒す

鬼首地域づくり委員会では、石巻市牡鹿地区の皆さんを送り出し、温泉に入ったり食事を提供したりフレッシュしてもらおうという取り組みを行いました。

三月十一日、牡鹿地区で働いていた鬼首の人たちが地震に遭い、高台に避難して難を逃れることができませんでした。津波により孤立し、その間、地元の人たちと避難所で暮らしました。その縁で、壊滅的な被害を受けた牡鹿地区の皆さんの力になりたいと今回の支援が実現。地域全体でもてなしました。

避難場所からふるさとを思う

鳴子温泉地域の旅館には、津波により被害に遭った市町から、一千人以上が一時的に避難しています(五月十九日現在)。五月十一日には、志津川中学校校庭で、追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」が開催され、インターネット中継により、鳴子公民館などで現地の様子が中継されました。参加者の皆さんは、南三陸町長の復興にかける意気込みや、音楽家の鈴木美紀子さんの歌などに耳を傾け、ふるさとに思いを馳せました。

ふるさとへの復興に全力を注ぐことが大崎市への恩返し

南三陸町で漁業を営む 三浦重治さん(鳴子ホテルに避難)



悪夢のような現実

三月十一日、尋常じゃない揺れに、真っ先に「津波が来る!」と頭をよぎりました。自宅は、明治三陸地震やチリ地震のときでも津波の被害がなかった小高い場所にあるため「ここまでは来ないだろう」と、貴重品は何一つ持たず、地域で一番高いところにある丸太小屋に移動しました。

しかし、私の考えは甘かった。津波は、六、七メートルある防波堤を軽々と乗り越え、数十メートルの黒い壁となり、街を襲ったのです。船が、家が、車が、次々に津波に飲み込まれ、見慣れた街並みが変わり果てた姿に…。地域の集落も全滅し、もう、なすすべもありませんでした。

この日は雪が降るほど寒かった。命が無事だった私たちは、とにかく周辺にある木の枝など燃やせるものを集め、火をつけて暖をとりました。対岸で避難している人たちに「こっちは大丈夫だ! そっちは無事か!」などと声をかけあい、元気づけたのを覚えています。津波に流され震えながらも生還した人、お年寄りを助けるために傷だらけになった子どもも…。悪夢のような現実の中、みんな、仲間を助け、今を生きること必死でした。



左上/待ちにまつた交流試合! 躍動する生徒たち 右上/古川北中の親の会の皆さんが作ってくれた昼食を食べながら交流を深めました
左下/鬼首の食材を使った料理で石巻市牡鹿地区の皆さんをおもてなし 右下/追悼集会で一人ひとりが手を合わせ祈りをこめました

二日目には、志津川自然の家という施設に何とか避難できましたが、町の役場は津波で壊滅、電気もない、電話もつながらない、どこに助けを求めてよいかかわからない状況で、自衛隊が救助に来るまでの約一週間、心も体も限界のなか、地域のきずなを武器に、陸の孤島で支え合って生きました。

ふるさとへの復興を誓う

私が鳴子温泉に避難したのは、四月四日。ふるさとを離れることは苦渋の決断でしたが、ホテルの皆さん、市内各地域の皆さんから温かいおもてなしを受け、本当に感謝しています。皆さんの協力により、南三陸町の情報も毎日入ってきます。ここで生活していると、元氣や勇気が湧き出てきます。

五月十一日に行われた追悼集会で、友人や知人に祈りを捧げた際には思いが込み上げ、涙が出そうになりましたが、震災から二カ月たった今、みんなで心を一つにしてお祈りできて、ほっとしたというのが正直な気持ちです。
大崎市の皆さんに親切にしてもらい、助けてもらった感謝とお礼の気持ちは、自分のふるさとを復活させることで返したい。ふるさとに戻る準備が整い次第、美しい海の町、南三陸町の復興に全力を注ぎます。